

音楽書をつくるということ

片桐文字 (株) 春秋社編集部

昨年(2013年)5月16日、愛知県立芸術大学からお招きを受け、音楽学特別講座で「音楽書をつくるということ：編集者の立場から」と題した講義をおこなった。学部一年生から博士課程の学生、OGまで含めて二十数名の方々が非常に熱心に耳を傾けてくださって、私自身にとっても、改めてこれまでの仕事を振り返り、新たな気づきを得ることのできた貴重な機会となった。

私は東京藝術大学で音楽学を学び、1991年に株式会社春秋社に入社、音楽関連を中心に単行本の編集をおこなっている。ひとくちに音楽関連書といっても、音楽学の専門的・学術的な書籍から、いわゆる「クラシック」ファン向けのエッセイ・入門書まで、実にさまざまなものを手がけている。

学術書で一つ例をあげるとすれば、2013年1月に亡くなられた小林義武先生の『バッハ：伝承の謎を追う』(1995年初版／新版2004年)がある。まだ編集者として経験の浅い時期に緊張しつつ取り組んだ本で、400字詰700枚に迫る精緻な手書き原稿を初めて手にした時の感動は、今でもありありと思い出せる。また、原稿や校正刷のやりとりにおける、小林先生の簡にして要を得た的確な指示、一つ一つの質問に丁寧にコメントつきで校正刷を返して下さったことなど、忘れがたい思い出がたくさんある。

「柔らかい」本の分野では、例えば、『静けさの中から：ピアニストの四季』は、一話読み切りでまとめられた洒落た(しかし内容は鋭く深い)エッセイ集である。室内楽の分野で素晴らしい仕事をしている(Hyperionレーベルに数々の貴重な録音あり)英国のピアニスト、スーザン・トムズさんの三冊目の著作を、同じくピアニストで英国と日本を往復しつつ活発な演奏活動をおこなっている小川典子さんが翻訳した書である。前年に刊行したばかりで、盛んに広報・販売活動をしていた時期だったので、講義の中で、翻訳出版企画の成立から刊行後の販売活動までの例として、紹介させていただいた。

私のこれまでの仕事としては、他に、桐朋学園大学教授の故・森安芳樹先生による一連の校訂楽譜（シマノフスキ、アルベニス、ラヴェルなどのピアノ作品）、即興をメインにした創造的音楽療法の創始者クライヴ・ロビンズ氏の著書をはじめとした音楽療法の関連書などがある。今回の講義では多くを触れられなかったが、私としては、個人的な思い入れも含めて、非常に大きな比重を占める仕事である。

と、このように、関わってきた刊行物を振り返れば、一冊一冊に語り尽くせないほどの物語がある。しかし、今回の講義で、さて何を話そうと考えたとき、そのような思い出話を語っても、学生諸氏の役には立たないと思った。それに、ひとくちに編集といってもさまざまで、雑誌編集ならばともかく、音楽の単行本の編集の仕事は、広くクラシック音楽の業界を眺めてみればごく小さな一角を占めるに過ぎず、関わる人たちの数も限られている。若く気概のある人にぜひ出版の仕事に参画してほしい、という気持ちは強いが、おそらく、「編集者になる」よりは、「著者・訳者になる」ほうが、確率が高いに違いない。そう考えて今回の講義では、単行本の編集・出版の概略を説明しつつ、著（訳）者として出版社と関わることになったとき、どのように企画の相談をすればよいか、企画成立の条件は何か、成立後の原稿執筆や校正刷のやりとりなど、できるだけ具体的なノウハウをお伝えすることにした。自分のやりたい仕事を、より良い形で実現するために、どのように出版社を「活用」するか。そのためには、相手（出版社）がどのような論理で動いているのかを知る必要がある。そのような観点で、下記のような項目について、お話をさせていただいた。

（１）編集者の仕事

編集者は、具体的にどんなことを日常の仕事としておこなっているのか。企画、編集、広報、販売など各フェーズにおける編集者の役割。

（２）編集・出版に特有の語彙（ボキャブラリー）

まず「著者」という言葉そのものも、いわば業界用語であり、日常では耳慣れない言葉である。出版社の人間と接触し始めたとき、まず戸惑うのが、特有の用語であろう。原書、版元、ゲラ、初校・再校、初版・重版、四六判、上製・並製、装幀、印税……さまざまな言葉を手がかりに、より突っ込んで、編集者の仕事を紹介。

(3) 企画が成立する条件

もちろんまず内容が、それと同等に大切なのが採算性である。「出版社は、内容はそっちのけで、売れる・売れないしか話題にしない」と嘆く著者の方々はたくさんいる。ではなぜ、売れなければいけないのか？ 編集者の置かれた立場と、出版社の論理。

(4) 企画書の作成のしかた

若い研究者・執筆者の場合、最初の単行本の出版は、翻訳書となる可能性が高い。翻訳書の企画を出版社に持ち込むとき、どのような企画書を準備していけば、編集者の興味を惹き、スピーディな企画検討にみちびくことができるか。

(5) 原稿の執筆、校正刷チェックの要点

「まず、原稿の締切と分量を守ること。ひとりよがりには陥らないよう、編集者のリクエスト、疑問点の指摘によく耳を傾けること。校正刷に過度の赤字を入れないこと」。講義にあたって、「良い著者」の条件とは何か？ と編集部と同僚たちに訊いてみたところ、彼らが異口同音に口にしたのがこのことだった。私も同感。ところが実のところ、専門研究者がもっとも苦手とするのがこの点なのである。きっと耳の痛い指摘と感じる方も多いに違いない（説教がましくてすみません）。締切日を目前に、さて何を書こうかと重い腰を上げる人も少なくないが、それはプロの書き手の仕事とは言えない。

……といったことをお話したあと、最後にもう少し大きな話題として、二つのことに触れてみた。

一つは、クラシック音楽業界にはどのような職種があるか、である。雑誌や書籍の編集、コンサートの企画制作は、目に触れやすく理解もしやすいので、志望者も多い。しかしそれだけでなく、音楽には実にさまざまな仕事があり、それぞれの領域で、音楽を熱烈に愛し、情熱をもって仕事に取り組んでいる人がたくさんいる。それなしでは、音楽の営みは成立しない。それに目を向けて、ぜひ、大学で学んだことを実社会で生かして欲しいと切に願う。音楽業界で輝いて活躍している人たちは、必ずしも音楽をプロパーとして学んだ人ではない。「音楽学専攻の学生 強みと弱み」にもここで触れた。

もう一つは、ネット時代になって焦眉の問題となっている著作権について。これは、「文化」と「お金」をどう考えるか、そして文化の「支援」と「消費」の問題にもつながる、大きな問いである。

「タダほど高いものはない」という言葉があるが、それは真実を衝いていると私は思う。タダ(無料)で、もしくは格安で、何かを手に入れるのは本当に「得なこと」だろうか？(コンテンツという言葉はどうも私は好きになれないのだが、)コンテンツを創る側にお金が回らなくなったら、新たなコンテンツは生まれなくなる。結果、文化は痩せ細っていくだろう。文化を享受する側にとってこれほど「損なこと」はないのではないだろうか？「良い仕事をしているな」と思ったら、一冊の本を、一枚のCDを、一回のコンサートのチケットを、身銭を切って購入する。それは創り手に対する何よりもの応援であり、身銭を切ることによって、より真剣に、批判的に、読み／聴くことにもなる。受け手側のその態度は、創り手をより真剣にさせるだろう。それは、大きく言えば、文化を創造する営為に参画することなのだ。

こんな大上段にふりかぶったことは、制作の現場にいる人間(物を売る立場の人間)は、ふだんは口にできない(口にすべきものでもない)。若い人たちにぜひこういった問題を考えてみてほしいと思い、言葉足らずではあるけれど、敢えてこの機会に語ってみた。

講義にあたって、事前に、「自分で本を書き、出版するとしたら、どのような企画が考えられるか」をテーマに、A4一枚のペーパー(いわば企画書である)を学生たちから提出してもらっていた。多彩な興味深いテーマが並んでいて、文章表現にもそれぞれの個性が表れており、非常に面白く、一人一人と突っ込んだ話をしてみたいと考えていたが、前半の講義が長引いてしまい、最後になっていささか駆け足で、ひとことずつ感想を述べさせていただく形になった。時間をかけて考え、文章にまとめてくれた学生たちにお詫びしたい。(それにしても企画書というものは、書いた人の現在のありようを驚くほど如実に示すものである。改めてそれを感じさせられた、興味深いひとコマだった。)

最後に、井上さつき先生をはじめ、増山賢治先生、安原雅之先生には大変お世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。